

令和六年三月十五日発行  
岐阜聖徳学園大学国語国文学第四十三号抜刷

袁宏道「満井遊記」小考

—— 教材研究の試みとして ——

内  
田  
健  
太

# 袁宏道「満井遊記」小考

—— 教材研究の試みとして ——

内田 健太

## はじめに

明末の文人袁宏道（一五六八～一六一〇。字は中郎、湖北公安の人。万曆二十年進士）の「満井遊記」『袁宏道集箋校』巻十七〔\*1〕は、その〈小品文〉と称される作品群のなかでも代表的な作品とみなされ、唐土のアンソロジーに数多く収められている〔\*2〕。

これは現代中国における古典教材の採録状況にも反映されているように、菊池武雄「中国の古典教育から探る新しい漢文教材（二）——中国の中学校の教材から——」〔\*3〕によれば、〈八年級（中二）下冊〉の「第六單元」で、

- 1 「小石潭記」 柳宗元
- 2 「岳陽樓記」 范仲淹
- 3 「醉翁亭記」 欧陽修

## 4 「満井遊記」袁宏道

が取り扱われている。このうち1～3については、本邦でも古くから親しまれてきた作品だが、「満井遊記」については菊池氏は、

4は北京の東北郊にある「満井」という景勝地を訪れての明代の「遊記」。宋代の「入蜀記」などの大旅行を題材としたものと違って、こうした近隣の勝地を訪れての「遊記」も興味深い。と紹介している。

現在も、「百度」を初めとする中国のウェブサイトで「満井遊記」を検索すると、多くの学習・探究に関する声が寄せられ、その〈定番教材〉としての位置づけがしのばれる。

近年、水野厚志・瀬戸口律子（編）『中国遊記選／中国文人の浪漫紀行』（明徳出版社、二〇一九年。以下、『中国遊記選』と略す）〔\*4〕が上梓され、その魏晉南北朝時代から清代末期までの「遊記」

の中で、「満井遊記」の原文（簡体字）・拼音・日本語訳・注釈が提示されたことは本邦の山水遊記、そして「満井遊記」の享受の上で極めて画期的なことといえよう。

ただし、本邦のいわゆる漢文教材においては「満井遊記」が採録されることはなく〔\*5〕、漢文古典に関する叢書・漢文読本の類で「満井遊記」が取り上げられることもなかった〔\*6〕。

そこで、本稿では、「満井遊記」の訓読および訳注を提供し、その漢文教材としての可能性を探ることを目標としたい。

## 一

はじめに、論を進める手続きとして、「満井遊記」を著した当時の袁宏道の状況を確認しておく。

「満井遊記」は、本文の結びに「己亥の二月なり」とあるように、万曆二十七年己亥（一五九九）二月、袁宏道三十二歳のときに著された。当時、袁宏道は一五九七年に蘇州呉県知事の職を辞し、しばらく東南を遊歴した後、一五九八年に北京に入り、順天府教授の職を授けられた〔\*7〕。

「満井遊記」は、白文で二百七十四字からなる。まず、題名の「満井遊記」の「満井」については、『中国游記選』の注①に、

満井 北京近郊の風致地区の一。東直門外の東北約三、四里の所にある。その場処に満井と呼ばれる井戸があるが、明代の王季重は、『游満井記』中に、「一亭の函井、その規五尺、四注にして中満つ。故に名づく。」

と述べられている〔\*8〕。

以下、意味段落ごとに、本文を書き下し文のかたちで示し、次いで注釈と訳訳を示したい。表記は現代日本常用字体に準じ、送り仮名は歴史的仮名遣いによるものとする。

### 【第一段落・書き下し文】

燕地寒し。花朝節の後、餘寒猶ほ厲し。凍風時に作り、作れば則ち沙を飛ばし礫を走らしむ。一室の内に局促して、出でんと欲するも得ず。風を冒し馳行する毎に、未だ百歩ならずして輒ち返る。

### 【注】

○燕 古代中国の国名。また現代の河北省の古名。当時の袁宏道の居住地。燕京は北京。清代に北京と名づけられた。

○花朝節 百花生日（百花生ずるの日）を指している。二月十二日、あるいは二月十五日。

【試訳】

燕の地は寒冷である。花朝節の後も、余寒はまだきびしい。寒風がしばしば吹き、吹けば砂礫を吹き飛ばす。室内にとじこもるばかりで、外に出ようとしてもできない。風をついで出ようとすると、百歩も歩かないうちに帰ってきてしまう。

【原文】

燕地寒。花朝節後餘寒猶厲。凍風時作、作則飛沙走礫。局促一室之内、欲出不得。每冒風馳行、未百步輒返。（本文四十二字）

【第二段落・書き下し文】

廿二日 天稍や和す。数友と偕に東直を出でて、満井に至る。高柳堤を夾み、土膏微かに潤ふ。一望すれば空濶にして、鵠を脱するの鵠のごとし。時に於いて氷皮始めて解け、波色乍ち明らかにして、鱗浪、層層として、清徹底を見はす。晶晶然として鏡の新たに開きて冷光の乍ち匣より出づるがごときなり。山巒、晴雪の洗ふ所と為り、娟然として拭くがごとく、鮮妍明媚たること、倩女の顔を醜ひて髻鬢の始めて掠るがごときなり。柳条、将に舒びんとするも未だ舒びず、柔稍、風に抜き、麦田、浅鬣、寸許り。遊人、未だ盛んならずと雖も、泉にして茗

【注】

する者、疊かさねにして歌ふ者、紅装にして蹇けんする者、亦た時時有り。風力尚ほ勁きんしと雖も、然れども徒歩すれば則ち汗出でて背を溼うるす。凡そ沙すなに曝さらすの鳥、浪なみを呻あふるの鱗うろこ、悠然として自得し、毛羽鱗鬣の間、皆喜氣有り。始めて知る、郊田の外未だ始めより春無くんばあらざるを。而るに城居者未だ之れ知らざるなり。

- 廿二日 万曆己亥（一五九九年）二月二十二日。
- 東直 北京城東北の東直門。
- 満井 北京城外にある名高い古井戸。
- 鵠 鳥の名。オオハクチョウ。
- 山巒 連なり続く山々。
- 鏡之新開 鏡の蓋を開く。「明星熒熒、開壯鏡。緑雲擾擾、梳曉養。」（明星の熒熒たるは、粧鏡を開くなり。緑雲の擾擾たるは、曉養を梳るなり。）（「明るい星がまたたくように見えるのは、宮女たちが化粧のために鏡の蓋を開けたもの。黒い雲が群がり起こるように見えるのは、朝を迎えて寝乱れ髪を梳かしているため。」）杜牧「阿房宮賦」「樊川文集」卷一（現代語訳は、松浦友久・植木久行編訳『杜牧詩選』岩波文庫、二〇〇四年）を踏まえる。

○匣Ⅱかがみばこ。

○柳条Ⅱ柳の枝。

○柔稍Ⅱイネの苗。

○髻之始掠也Ⅱ髻は、まげ、もとどり。掠は、くしけずる。

○浅鬣Ⅱ馬のたてがみ。麦の穂を馬のたてがみになぞらえたもの。

○泉而茗者Ⅱ泉の水で茶をわかつ。

○壘而歌者Ⅱ壘は「さかだる」。酒樽を手に歌う。

○紅装而蹇者Ⅱ蹇はやせ馬。鮮やかな衣装でやせ馬に乗ること。

○呷浪之鱗Ⅱ魚が水を吸う様子。

○毛羽鱗鬣之間Ⅱ鳥の羽毛、魚のひれやうろこ。

### 【試訳】

二月二十二日、天候は少しく和らいだ。数人の友といっしょに東直門を出て、満井に到着した。大きな柳の木が川堤をはさま、肥えた土地は微かに潤っていた。一望すると、広々として、まるで鳥がこから出たオオハクチョウのような気分だ。おりしも、水面の氷が融けはじめ、川面が明るく光りだして、鱗のように波紋がたち、透き通って水底がみえるようだ。きらきら輝き、鏡の蓋を開いて、冷たい光が鏡箱から発するかのようである。

連山は、春の光を浴びた雪に洗われ、美しく拭われたようで、

そのあでやかで美しいことは、美女が顔を洗ってから、髪をくしけずったかのようである。柳の枝から芽がいまにも出ようとするがまだ出ず、やわらかな苗が風になびき、麦の畑には麦の穂がたてがみのようにゆれている。観光客はまだ多くはないけれども、

泉の水で茶を沸かす者、酒樽を手にして歌う者、紅く鮮やかな衣装でやせ馬に乗る者も、やはりいつものようにいる。

風の勢いはまだ強いけれども、歩いてみると、汗が出て背中を濡らすほどだ。砂の上で日向ぼっこをする鳥たち、波間で口を開ける魚たち、すべてが悠然と自得し、鳥の羽毛や、魚のひれやうろこのすみずみにまで、すべて喜びがあふれているようだ。

このときやつとわかったことがある。郊外の田野には、まだ春がきていないということはなかったのだ。ただし都城で暮らす者がまだ気づかないだけなのだ。

このときやつとわかったことがある。郊外の田野には、まだ春がきていないということはなかったのだ。ただし都城で暮らす者がまだ気づかないだけなのだ。

このときやつとわかったことがある。郊外の田野には、まだ春がきていないということはなかったのだ。ただし都城で暮らす者がまだ気づかないだけなのだ。

### 【原文】

廿二日天稍和。偕数友出東直、至滿井。高柳夾堤、土膏微潤。一望空濶、若脫籠之鵠。於時氷皮始解、波色乍明、鱗浪層層、清徹見底。晶晶然如鏡之新開而冷光之乍出于匣也。山巒為晴雪所洗、娟然如拭、鮮妍明媚、如倩女之釀面而鬢鬢之始掠也。柳

条將舒未舒、柔稍披風、麦田淺蠶寸許。遊人雖未盛、泉而茗者、疊而歌者、紅裝而蹇者。亦時時有。風力雖尚勁、然徒步則汗出狹背。凡曝沙之鳥、浪之鱗、悠然自得、毛羽鱗鬣之間、皆有喜氣。始知郊田之外未始無春。而城居者未之知也。（本文百八十七字）

【第三段落・書き下し文】

夫れ能く遊を以て事を墮おたらせずして、山石草木の間に瀟然たる者は、惟だ此の官のみなり。而るに此の地適々余と近し。余の遊將に此より始まらんとす。悪いくんぞ能く紀無からん。己亥の二月なり。

【注】

- 墮事 公務をさまたげること。おこたること。
- 瀟然 さらばりしたさま。ゆつたりくつろぐさま。
- 此官 順天府教授の職を指す。繁劇であった前職の呉興知事と比較している。
- 紀 「記」に通ず。遊記のこと。
- 己亥 万曆二十七年（一五九九年）

【試訳】

いったい、行楽のために公務をさまたげることなく、山石草木

の中でさらばりとしていられるのは、ただこの官職だけだ。しかもこの地は、偶然にも私の住まいの近くにあり。私の遊覧はここから始まるうとしている。どうして遊記を書かずにいられよう。

万曆二十七年二月。

【原文】

夫能不以遊墮事、瀟然於山石草木之間者、惟此官也。而此地適与余近。余之遊將自此始。悪能無紀。己亥之二月。（本文四十六字）

以上で、「満井遊記」本文の読解を終える。次節では、「満井遊記」の教材化に向けて課題となる点を論じたい。

二

『中国游記選』では、注①で「満井遊記」を概観して次のように述べている。

作者は明快な筆法で満井の初春の明媚な景色を描写している。実景に触れて湧き起こる愉快な心情を表現して、写景（風景

描写)叙情(感覺描写)均しく生き生きとして自然。文章は修飾を事とすることなく、言語は簡單明瞭で流暢。作者の散文の特色を具体的に現している。

一方、「満井遊記」を始めとする袁宏道北京在任期以降の遊記を考察した棟方徳「袁中郎の山水観―北京在任期以降の遊記を中心に」[\*9]は、「満井遊記」について、呉県や江南地方で著された数多くの「遊記」と比較考量して、次のように論じている。

また、在京期以降の特徴としてもう一点指摘できるのは一つの作品の字数がだいぶ増加していることである。呉令期および漫遊期の作品の字数は、ほとんどがいわゆる小品文といわれる比較的短いものであった。平均すればおよそ二百字前後で、中には「石橋巖」や「聴響水石記」のような五十字に満たない作品もある。一方、四百字前後の遊記は「蘭亭記」「五泄」「天目」「釣台記」など数えるほかしかない。字数の少ない遊記は、特に杭州を中心とした江南地方に遊んだ時期に多く見られる。おそらく、呉県での役人生活から開放された喜びに溢れていたがため、彼の感情は高ぶり、感覺は一層研ぎ澄まされていたに違いなく、その結果周到な風景描写や理屈は省かれ、比較的短い文が多くなったものと考えられる。

在京期の遊記は、平均すれば字数はおよそ四百字前後。五、

六千字を超える遊記も少なくない。以下に、この時期の作風を知るためにも、幾つかの作例を読んでみたい。

として、「満井遊記」の一節が挙げられている。

山巒晴雪の洗う所と為り、娟然として拭くが如し。鮮妍明媚、倩女の面を頰ほい、鬢鬢の始めて掠かすがごときなり。

これは袁中郎の遊記の中でも、「虎丘」や「西湖一」「西湖二」と並んで、各種の小品文集にもしばしば採られている作品であるが、ここには風景に溶け込み、積極的に楽しもうとする態度がみられる。

さらに棟方氏は、この時期の袁宏道の遊記の特質として、「諧謔を交えた明るさと、風景への陶醉」を挙げ、「その表現方法は、平明でリズムに乗った言葉が連ねられている。つまり、この時期までは、彼の遊記に、文が多少長くなったという以外に、際立った変化は認められないといえよう。」と論じている。

『中国遊記選』の「実景に触れて湧き起こる愉快な心情を表現して、写景(風景描写)叙情(感覺描写)均しく生き生きとして自然。文章は修飾を事とすることなく、言語は簡單明瞭で流暢。」という批評や、棟方氏の論じる「諧謔を交えた明るさと、風景への陶醉」が「平明でリズムに乗った言葉」で表現されているという「満井遊記」への評価は、そのまま教材としての美点につながるものと

考えられる。

しかし、『中国游記選』は「文章は修飾を事とすることなく、言語は簡單明瞭で流暢」と評するのだが、それを言葉通りに受け止めてよいものだろうか。『中国游記選』はこの「満井遊記」に⑤もの注を施している。苦心の結果かと思われるが、現在の高校漢文教材や大学入試漢文の通例に照らすと、三十五の注はいかにも多い。孫虹・譚学純『袁宏道散文注釈』（\*10）でも三十もの注を施している。本稿ではそれを考慮して、振り仮名を多用することで注の数を絞ることにとめたが、それでも注の数は二十四にのぼった。これは決して少ない数字とは言えないだろう（\*11）。

また、棟方氏の引用する「山巒晴雪の洗ふ所と為り、娟然として拭くがごとく、鮮妍明媚たること、倩女の面を醜ひて髻鬢の始めを掠るがごとくなり。」の一節は、受身の句法、そして比況の「如」など重要語彙が用いられ、大学入試漢文で「傍線」が引かれやすい箇所ではあるが、ここも杜牧「阿房宮賦」の一節を踏まえたものであることを押さえないければ、理解しづらいところである。

その意味で、「満井遊記」の文章は、平明な叙述のなかに、修辭を凝らした（写景（風景描写）と（叙情（感覚描写）とが織り込まれているのがポイントとなっており、読み手には、さらりと平明に描いたかのようにみえるその描写をしつかり押さえた読解が求め

られよう。

さらに、「満井遊記」の教材化・出題化の課題としては、春の訪れへの驚きと喜びという主題を読解の基軸に据えつつ、読解の補助となるよう修辭の内実を丁寧問い、あわせて基本語彙・再読文字・受身・反語・二重否定などの基本的な事項をとらえることが求められよう。

「満井遊記」はこのような漢文の基本事項を学ぶのに好適な素材文といえる。例を挙げるならば、「柳条将舒未舒」「而城居者未之知也」「余之遊将自此始」の句は、再読文字の理解を図る上で適当なものであり、「未始無春」は、再読文字を用いた二重否定の用例を学ぶのに手ごろな句であるといえる。さらに、結びの「惡能無紀」も反語の句法を学ぶのに恰好の例といえよう。

また、十分な注を用意しつつ、「若脱籠之鵠」は、どんな心情を喩えたものか（これは、呉県知事の桎梏を乗り越えた袁宏道自身の感慨とも、あるいは現代日本の高等学校の学びを終えた生徒たちの解放感にも通ずるものといえよう）、あるいは「如鏡之新開而冷光之乍出于匣也」「如倩女之醜面而髻鬢之始掠也」はそれぞれどのような情景を喩えたものかという比喩解釈を問うことも可能であろう。

## おわりに

早春、まだ肌寒さが残る北京から、近郊の観光名所である満井をたずね、あたりに漂う春の気配を清俊な筆で描き、思いがけず新しい季節の訪れに出会えたことへの驚きと喜びという「満井遊記」の主題は、本邦の読者にとっても共感をもって読み進められるものと思われる。本邦においても、「満井遊記」が教材として活用されることを願うものである。

## 注

- \*1 錢伯城『袁宏道集箋校』卷十七『瓶花齋集』卷五『上海古籍出版社、一九八一年初版、二〇一八年第三版、七三三〜七三四頁。なお、錢伯城による箋・校に、『箋』万曆二十七年己亥（一五九九）二月作、『満井』見卷十五遊満井箋。【校】題】翠本作「遊満井記」。
- 【評】陸雲龍評「而髻鬢之始掠也」句云「形容雅情」、『翠娛閣選本、下同）。又評「皆有喜氣」句云、「頓挫生姿」又評全編云、「写景亦如平蕪、淡色輕陰、令人意遠。」とある。
- \*2 棟方徳「袁中郎の山水観―北京在任期以降の遊記を中心に」『二松学舎大学人文論叢』第五十二輯、一九九四年）は、「これは

袁中郎の遊記の中でも「虎丘」や「西湖一」「西湖二」と並んで、各種の小品文集にしばしば採られていると作品であると指摘する。なおこの一九三〇年代の〈小品文〉熱については、岡崎文夫「袁中郎研究の流行」『中国文学月報』一卷1号、一九三六年）、入矢義高「袁宏道」『解説』（岩波書店、一九六三年）を参照。また、中国文学史上における袁宏道「遊記」の位置づけについては、周質平「公安派的文学批評及其発展 兼論袁宏道の生平及其風格」第五章 公安派山水癖及其遊記」（台湾商務印書館、一九八六年）、梅新林・俞樟華（主編）『中国遊記文学史』第八章 袁宏道等小品大家的傑出成就（学林出版社、二〇〇四年）参照。

- \*3 『新しい漢字漢文教育』第五十四号、二〇一二年。
- \*4 水野厚志・瀬戸口律子（編）『中国遊記選―中国文人の浪漫紀行―』（明徳出版社、二〇一九年、八二頁〜八六頁）
- \*5 阿武泉監修『教科書掲載作品一三〇〇〇』（日外アソシエーツ、二〇〇八年、二六八頁）に拠る。本書によると、袁宏道の作品が教科書に採録されたのは、「山居雜記」「高等学校古典2」（三省堂、一九九六年、およびその改訂版二〇〇年のみである。ただしこの「山居雜記」は、古来、袁宏道『狂言』にまつわる贋書の問題が指摘されており、錢伯城『袁宏道集箋校』は採っていない。このことについては、漢詩・漢文教材研究会編『漢詩・漢文解釈講座 第十四卷

文章Ⅱ(唐代以降)「袁宏道 山居遊記」(昌平社、一九九五年。六六六頁―六七二頁)参照。教材採録の状況に関しては、宮崎洋一「中学校・高等学校の国語の教科書に掲載された漢文の教材一覽」『文教国文学』第五十六号、二〇二二年)、宮崎洋一「中学校・高等学校の国語の教科書に掲載された漢文の教材一覽」『文教国文学』第五十九号、二〇一五年)、宮崎洋一「中学校・高等学校の国語の教科書に掲載された漢文の教材一覽(その2)」『文教国文学』第六十三号、二〇二三年)を参照。

\*6 「国立国会図書館デジタルコレクション」で「満井遊記」(満井遊記)を検索してみても、その例を発見できなかった。https://id.nii.ac.jp/ 最終アクセス日 二〇二四年一月六日。本稿のウェブサイトで引用の最終アクセス日は同日。

\*7 筆者は袁宏道の生涯を三期に区分し、この「満井遊記」執筆の時期をその第二期に位置づけている。拙稿「学古」と「師心」の間―袁宏道研究の現状と課題―『東洋古典学研究』第十五集(二〇〇三年)。この時期の袁宏道については詳しくは拙稿「袁宏道前期「学問」考」(上・下)『東洋古典学研究』第九集・第十集(二〇〇〇)を参照されたい。なお、孫虹・譚学純『袁宏道散文注釈』(上海古籍出版社、二〇一六年、一〇九頁)では、「満井遊記」執筆当時の袁宏道の官職について、「指作者当时在京都所居国学助教官職」

とするが、袁宏道が国子監助教に任ぜられたのは一五九九年の三月のことである。入矢義高『袁宏道』「年譜」(岩波書店、一九六三年)、また葉臨之『性靈山月 袁宏道伝』(作家出版社、二〇一八年、一八三頁)参照。

\*8 詳しくは錢伯城『袁宏道集箋校』(第三版)に「満井」見卷十五「遊満井箋」とあり、『袁宏道集箋校』卷十四「遊満井」の【箋】には「満井」長安客語四記満井曰、「出安定門、循古濠而東三里許、有古井一、徑五尺餘。飛泉突出、冬夏不竭。好事者鑿石欄以束之。水常浮起、散漫四溢。井傍蒼藤叢草、掩映小亭。都人為奇勝。」(六四六頁)とある。また『袁宏道集箋校』卷十五の「遊満井」の【箋】には、「万曆二十七年己亥(一五九九)年在北京作。満井見卷十四「遊満井」箋。扱卷十七「満井遊記」、此遊在二月。」(六八一頁)とある。

\*9 『二松学舎大学人文論叢』第五十二輯、一九九四年。なお、棟方氏には本稿に先立つ「袁中郎の遊記について―蘇州・杭州時期を中心に―」『二松』第七集、一九九三年)があり、あわせて参照されたい。

\*10 孫虹・譚学純『袁宏道散文注釈』については前掲注7を参照。  
\*11 ちなみに、平成三年度(一九九一)大学入試センター試験問題(追試験)に、袁宏道の詩論「陶孝若枕中嚙引」が出題されたが、その注の数は十である。